

# -ly 接尾辞の扱いをめぐって 文法化 (grammaticization) の観点から

山内 信幸

## 0. はじめに

本稿の目的は、一般に英語の副詞を形成する接尾辞と目されている -ly 形をとりあげ、通時的な観点および共時的な観点の両方から、-ly 接尾辞のもつ文法的意味あいを文法化 (grammaticization) の枠組みにもとづいて考察することにある。

まず最初に、-ly 形の副詞を形容詞から一律に派生させる従来の形態論的試みの不備を指摘し、つづいて、Guimier (1985) の実体化と形式化との相関関係にかんする仮説にもとづいて、-ly 接尾辞の通時的な位置づけを試みる。さらに、共時的観点から、-ly 形のつく副詞と -ly 形のつかない副詞の分布を Opdahl (1989) のイギリス英語およびアメリカ英語を対象としたコーパス調査にもとづいて概観し、-ly 接尾辞にまつわる文法的・意味的变化を検討する。

なお、本稿で展開される議論は、基本的には、副詞を形容詞から唯一的に派生させる立場ではなく、副詞を副詞として語彙的に派生させる立場を擁護するものであって、Yamauchi (1985, 1986) および山内 (1987, 1991) を補完するものである。

## 1. -ly 接尾辞をめぐって 理論的側面から

形容詞と副詞を形態論的に関連づける支配的な可能性としては、形態論上、形容詞に *-ly* を付加することによって副詞を派生させるものであり、以下の発言にも示されているように、

- (1) “ This ending [-ly] serves to form adverbs from nearly all adjectives . . . . ”<sup>1</sup>  
 “ with [-ly] it is possible to form an adverb . . . from any adjectives. ”<sup>2</sup>  
 “. . . it seems sufficient just to take an adjective—almost any English adjective—and tack on *-ly* to make an adverb. ”<sup>3</sup>

多くの文法学者の認めるところでもあるように思われる。

たとえば、この立場をとる Kjellmer (1984) は、*-ly* 形の副詞の生成にかんして、統計学的・意味論的分析をおこない、形容詞におうじて、*-ly* 形の副詞の生成力を調べ、形容詞から副詞を語彙化する要因として、形容詞（あるいは形容詞と共起する名詞や節）のもつ特質のひとつである “dynamic” という基準によって、一般化を試みた。<sup>4</sup>

具体的には、まず、どのような形容詞あるいは形容詞の形態論的タイプが *-ly* 形の副詞を生成するかを調べるため、形容詞の範疇として、*-able*, *-al*, *-an* など主なものを50個選び、Lancaster-Oslo/Bergen Corpus にもとづいて、その分布数と、さらに、対応する語彙化された *-ly* 形の副詞の分布数をもとめた。これによって、*-ly* 形の副詞の生成力には違いがあり、その比率のもっとも高いもので、*-ful* *-fully* の 41%、もっとも低いもので、*-oid* *-oidly* の 0% であり、平均は13%と報告している。<sup>5</sup>

皮肉にも、Kjellmer (1984) の調査結果が物語っているように、*-ly* 接尾辞の副詞の生成力が平均で10%強にすぎないという事実は、*-ly* 接尾辞をもってして、ほとんどすべての形容詞から副詞を生成することのできる非常に生産的な接尾辞とみなす従来の見解におおきな疑義を投げかけるものである。

形態論の立場からも、形容詞（基体）とその派生形である *-ly* 形の副詞を

並行的にとらえようとする見解<sup>6</sup>にたいして、反例となりうるデータがいくつが存在する。一般に、次の (2) から (4) の例文が示すように、-ly 接尾辞は、形容詞から副詞を派生させる過程において、たんに語彙的な意味の変更だけでなく、基体の項構造のうけつぎを阻止しながら、基体の統語範疇の変更をひきおこしていると考えられる。<sup>7</sup>

- (2) a. proud of the queen  
b. \*proudly of the queen
- (3) a. fearful of Bill  
b. \*fearfully of Bill (Jackendoff 1977: 78)
- (4) a. angry at Bill  
b. \*angrily at Bill (McCawley 1988: 193)

しかしながら、実際には、-ly 接尾辞があらゆる場合に基体の項構造を阻止するわけではない。たとえば、

- (5) a. Their treatment is still different from that of almost every other contemporary British band.  
b. They still get treated differently from almost every other contemporary British band.
- (6) a. Her decision was independent of mine.  
b. She decided independently of me. (Radford 1988: 139)

うへの例では、形容詞の場合と同様に、-ly 形の副詞となっても、それぞれ、

(5) では from から band までの部分、あるいは、(6) では of me の部分を補部としてしたがえていて、形容詞の項構造はうけつがれたままである。

さらに、言語習得の立場からも興味深い指摘がみられる。Derwing (1976) では、8～12歳までの子供40名、13～17歳の青少年28名、大人27名を対象に、ある動作をあらわしている絵をみせながら質問形式で空所に適語をうめる問題が用意され、その一例として、副詞をあらわす -ly 接尾辞をもちいる運用能力が調査された。そのさいには、実在する形容詞だけでなく、ノンセンス語も混在させ、各形容詞から -ly 形副詞の生成について調査したところ、ノンセンス語の場合には、子供、青少年、大人の順に、それぞれ、20%、79%、80%という正解率がえられた。<sup>8</sup> 一般に、生産的な接辞は習得時期が早いと考えられているので、この実験報告もまた、-ly 形を生産性の非常に高い接尾辞とみなすことへの反例と位置づけることができよう。

以上の議論からもあきらかなように、すべての形容詞に付加することで副詞を生成する非常に生産的な接尾辞として -ly 接尾辞を位置づける従来のとらえ方には若干の問題点があるように思われる。

## 2. -ly 接尾辞をめぐって 通時的観点から

本節では、まず、-ly 接尾辞の語源的発生からその確立・発達にいたるプロセスを通時的に概観し、文法化 (grammaticization) の枠組みのなかで、Guimier (1985) によって示されている実体化と形式化との相関関係にかんする仮説に依拠し、-ly 接尾辞の変遷を検討する。

具体的な議論にはいるまえに、文法化というものは、どのような考え方があるのかを確認しておこう。Hopper & Traugott (1993) によれば、“the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions”<sup>9</sup>と規定されている。そもそも「文法化」には、“grammaticalization”と“grammaticization”という2つの用語があてられ、

元来、Meillet (1912) の “ the attribution of a grammatical character to a previously autonomous word ”<sup>10</sup> という定義が出発点になっている。研究者によって、好みの問題として、両方が使い分けられているけれども、しいて違いをいえば、研究方法の力点のおき方の違いということができよう。Hopper and Traugott (1993) では、“ ‘ grammaticalization ’ stresses the historical perspective on grammatical forms, while ‘ grammaticization ’ focuses on the implications of continually changing categories and meanings for a synchronic view of language, thus placing the entire notion of synchrony into question ”<sup>11</sup> と説明されていて、本稿の議論は、まさしく、後者の視点により重点をおいているため、「文法化」には “ grammaticization ” という用語をあてることにする。

文法化の定義にはさまざまなものが考えられるが、<sup>12</sup> それらに共通していることは、Heine *et al.* (1991) によれば、(a) 共時的、通時的を問わずに、過程 (a process) ととらえること、(b) 語や形態素の発達などのように、形態論的なプロセス (a morphological process) であること、(c) より文法化の進んでいない単位からより文法化の進んでいる単位への推移であって、この逆はありえないという点で、一方向的 (unidirectional) なプロセスであることとされている。<sup>13</sup>

本稿の議論には、当然のことながら、本節で扱う ‘ Gestalt ’ という意味が実詞 lic と接尾辞 -lic へ分岐したような意味的および文法的推移の過程だけでなく、次節で扱う -ly 形のつかない副詞の文法的機能の推移などがふくまれることになる。

それでは、-ly 接尾辞の発生から確立にいたる過程を簡単にみてみることにしよう。発生的にみれば、OE 期では、形容詞に -e 接尾辞 (起源は所格) をつけて、副詞をつくることがひろくおこなわれていた手法であった。たとえば、形容詞はそのままの語幹でもちいられ、副詞の場合は、‘ dēoþe (=deeply) ’ や ‘ fæste (=firmly) ’ のように、-e 接尾辞が使われていた。

また、この時期では、副詞を派生させる -e 接尾辞よりもはるかに優勢で

あった語尾として、-lice があった。形容詞の場合、‘ woruldiċ (=worldly) ’ や ‘ geōmorliċ (=sad) ’ のように、-lic が名詞や他の形容詞から形容詞を派生させるためにもちいられた。一方、副詞は、上述の手法にならって、形容詞の語尾 -lic に -e をつけて、たとえば、‘ blindlice (=blindly) ’ のように、つくられた。そのため、-lic 形で形容詞が、-lice 形で副詞はおわるものというのが通例とされ、OE の初期から、-lice 接尾辞が副詞語尾と意識されることがおおく、たとえば、‘ beadlice (=boldly) ’ や ‘ swetelice (=sweetly) ’ のように、OE 期では -lic 形をとみなわない形容詞からも -lice 形の副詞がつけられることが頻繁におこなわれた。

ME 期になると、語尾の強勢のおかれない母音は次第に弱音化して、その音は黙字化するようになり、やがては、綴り字のうえでも消失することになる。その結果、-e 形の副詞も、-lice 形の副詞も、それぞれ、それに対応する形容詞と同形になって、16世紀以降は、形容詞と副詞が、いわば同形として（とくに、この時期、-lic と -lice の対立は、-lic と -lic をへて、-ly に収斂された）並存した形で英語史のなかにそれぞれの姿をとどめていくことになる。

このような形容詞と副詞が同形態のままに並存する状況では、-ly 形をもつ副詞に特別の意味が生じた場合、-ly 形のついていない副詞に形容詞本来の意味が保持されることがある。O.E.D. では、たとえば、hardly と hard の副詞を例をとってみると、‘ with energy ’ という意味で、初出時期としては、それぞれ、hardly (c1205)、hard (c1000) があげられているけれども、hardly に ‘ almost not; not quite, scarcely ’ という新しい意味が16世紀半ば以降（厳密には、1553年初出）くわえられると、1818年の記載を最後に、それ以後は、hardlyの ‘ with energy ’ という意味は廃語扱いとなってしまっている。また、-ly 形のついていない副詞の意味が対応する形容詞のそれと対応しなくなると、-ly 形のついた副詞でその意味に対応することも観察される。たとえば、そもそも clean という副詞にあたえられた ‘ wholly, entirely ’ などとい

う語義 (初出はc1050) は、対応する形容詞 *clean* にはみられず、<sup>14</sup> この形容詞は、もっぱら、' *clear* ' や ' *pure, undefiled, unsullied* ' などの意味をあらわすだけであったため、形容詞本来の意味に対応する ' *without dirt or stain, purely* ' などの意味をあらわす副詞 *cleanly* は、およそ12世紀頃に初めて使われたしたと考えられる。

-ly 形のついた副詞と -ly 形のつかない副詞の分布については、16~17世紀頃になると、前者の副詞は動詞の修飾語としてかなりな頻度でもちいられた一方で、後者の副詞は形容詞や副詞の前では自由に使われたが、動詞との共起はかなり制限されるようになった。17~18世紀では、さらにその制限が厳しくなり、18世紀末頃になると、-ly 形のつかない副詞はさらに衰退の途をたどることになる。おそらく、これは、-ly 形のついた副詞こそが「正しい」副詞であるとする当時の規範文法の影響がおおきく影をおとしていたものと考えられる。

以後、-ly 形のつかない副詞の扱いをめぐって、その形態から単純形副詞 (flat adverb) と形容詞という2とおりの可能性が生じることになるが、EModE 期から19世紀頃までにみられた用法として、次例のような場合が観察される。

(7) His grace looks *cheerfully* and *smooth* to-day. (*Richard III*, III, iv, 50)

(8) I stood for a minute, feeling *dreadfully*. (*J. Austen, Emma*, 179)

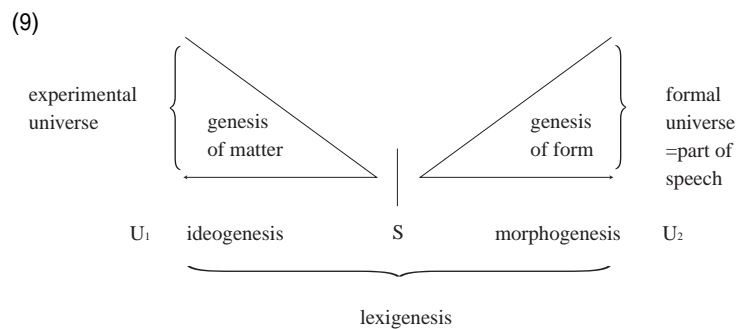
これらの例では、自動詞のうしろに -ly 形のついた副詞が生起している。このような用法は、現代アメリカ英語でも比較的良好に保存されているといわれているが、<sup>15</sup> たとえば、(6) の *smooth* は、現代英語では、本来、*look* は補語に形容詞をとるとされているため、形容詞とみなすのが妥当とされているが、この時期における形容詞と副詞の形態上の混在性に鑑みれば、-ly の脱落し

た副詞とみることはいかなるであろうか。この問題は、本稿の議論の中心である形態と意味との関連性に直接かかわるものであるが、現代英語における -ly 形のついた副詞と -ly 形のつかない副詞の扱いについては、次節で詳しく検討することにする。

いままで、-ly 接尾辞の語源的発生からその確立にいたるプロセスおよびそれ以降の副詞の位置づけを形態論的観点から簡潔にみてきたわけであるが、つぎに、Guimier (1985) で示されている実体化と形式化との相関関係にかんするモデルにもとづいて、-ly 接尾辞の意味と形態の変遷を検討してみることにして。

そもそも、OE 期の実詞 *lic* は、インド・ヨーロッパ祖語の語幹 \**lig-* から由来し、‘form’あるいは‘Gestalt’を意味していた。それが、意味のうえで二重の発達をとげることとなり、一方で、純粋に意味論的レベルでは、‘body’という意味の *lic* (Goth *leik*; OS, ON *lik*; OHG *lih*) となって、いわゆる、意味の特定化がおこり、他方、意味論的・形態論的レベルでは、意味が弱化し、たんに‘similar’を意味する接尾辞の -*lic* となった。

Guimier (1985) は、このような意味変化を有効な時間軸のうえで生成 (genesis) される心的過程ととらえ、“lexigenesis” とよび、次のような図式であらわした。

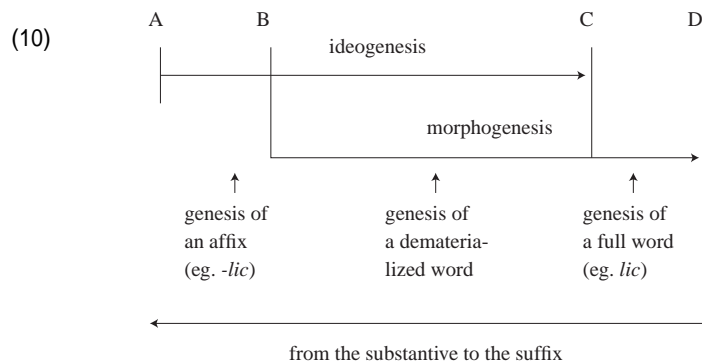




このモデルは、当該の語の実体上の “significate” (すなわち、その意味) と形式上の “significate” (すなわち、the part of speech) を意味変化というプロセスでとらえ、実詞から接尾辞への移行をとらえようとするものである。つまり、‘Gestalt’ を意味する実詞 *lic* が接尾辞 *-lic* へ移行するさいに、“ideogenesis” と “morphogenesis” とよばれる2つのプロセスを仮定し、そのプロセスの途中で生じる「遮断 (interception)」によって、意味変化の位相をとらえようとするものである。

具体的には、実詞 *lic* の場合を考えてみると、もともとの ‘Gestalt’ という意味は、“ideogenesis” のプロセスの途中で「遮断」されることもなく、実体上の “significate” である ‘body’ という意味があたえられ、さらに、“morphogenesis” のプロセスで形式上の “significate” が付与されることで、形式もそなえた実詞 *lic* となっている。他方、接尾辞 *-lic* の場合は、“ideogenesis” のプロセスのかなりは早い段階で「遮断」され、その時点では、意味付与がじゅうぶんにおこなわれず、非常に漠然とした意味をあたえられるにとどまり、“morphogenesis” のプロセスにはいるまえに「遮断」されているので、形式があたえられず、語となりえることなく、実詞としての地位を欠いた要素のまま、接辞としての地位を保持するだけである。

Guimier (1985) は、上述の実詞 *lic* から接尾辞 *-lic* への推移を次の図を示すことで明確にしている。



Guimier (1985) のモデルで重要なことは、(a) 実詞 *lic* と接尾辞 *-lic* の関連性を漸進的に推移していく連続体のなかでとらえることを提案し、また、(b) その推移を実質化と形式化という複線のプロセスのなかで実現したものととして明確に示したことであろう。次節では、共時的観点にもとづいて、現代英語における *-ly* 形をつく副詞と *-ly* 形をつかない副詞の並存状況を文法化の観点から検討してみることにしよう。

### 3. *-ly* 接尾辞をめぐって 共時的観点から

いままでは、通時的な観点から *-ly* 接尾辞の確立過程を検討したが、本節では、現代英語における *-ly* 形をつく副詞と *-ly* 形をつかない副詞の並存状況を共時的な観点からとらえなおし、文法化という枠組みで包括的に扱う可能性を探ることとする。具体的には、Opdahl (1989) がおこなったイギリス英語およびアメリカ英語を対象とした *directly* と *direct* の生起にかんするコーパス調査にもとづいて、*-ly* 形をつく副詞 *ly* 形をつかない副詞 形容詞という3つのパラダイムのなかで、*-ly* 形をつかない副詞が、形態上、*-ly* 形を失ってしまったため、次第に形容詞としての範疇にくみこまれつつあるという仮説を提案する。

まずは、共時的な観点から、*-ly* 形をついた副詞と *-ly* 形をつかない副詞の文法機能を考察するため、現代英語における動詞修飾の副詞としての *direct* と *directly* の使用と態度について、イギリス英語およびアメリカ英語を対象におこなった Opdahl (1989) の調査結果を簡単に概観してみることにしよう。

Opdahl (1989) では、まず、イギリス英語およびアメリカ英語のコーパスを使って、*direct* と *directly* の分布を調べ、さらに、Greenbaum & Quirk (1970)<sup>18</sup> のいう、いわゆる、“*judgment test*” によって、主語の有生・無生、目的語の位置やその軽重などの差異をつけた、それぞれの副詞をふくむ例文を被験者にアトランダムに提示し、その容認可能性の判断をもとめた。

イギリス英語としては Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (以下、LOB) を、アメ

リカ英語としては Brown Corpus (以下、Brown) を利用し、それぞれの副詞の生起数および生起率を集計したところ、次のような結果がえられた。

(11)

	direct		directly		Total	
	no.	%	no.	%	no.	%
LOB	20	25.6	58	74.4	78	100
Brown	2	1.9	103	98.1	105	100
Total	22	12.0	161	88.0	183	100

19

うえの数字から、(a) LOB および Brown の両コーパスともに、directly のほうが direct にくらべてかなりの頻度でもちいられているということ、しかも、(b) その傾向はアメリカ英語のコーパスにかなり強くみられることが指摘されよう。<sup>20</sup>

さらに、Opdahl (1989) は、-ly のついた副詞および -ly のついていない副詞のペアそれぞれ20個をふくむ例文180例について、質問形式で、イギリス人のネイティブスピーカー50名、アメリカ人のネイティブスピーカー50名、計100名に判断をもとめた。被験者の選出は、性別、年齢、教育的背景についての多様性が尊重された。実際のテストでは、基本的には、+か-という判断基準にもとづき、回答の可能性としては、-ly 形のつかないものを選択する場合 (selection of the minus form)、-ly 形のつくものを選択する場合 (selection of the plus form)、両方の形式を容認する場合 (acceptance of both forms)、そして、両方の形式を容認しない場合 (rejection of both forms) の4とおりが認められた。例文は、もともと、コーパスにあったものか、あるいは、若干修正をくわえたものがもちいられた。なお、当該の direct と directly の判断については、13例が使用された。

そもそも、意味論的にみて、direct と directly の守備範囲は、若干異なっている。たとえば、LDCE (1978)<sup>21</sup> が示すように、direct は “SPATIAL” な読みみだけであるのにたいし、directly のほうは “SPATIAL” と “TEMPORAL”

な読みの両方を許容する。このことは、次の(12)の例文の判断結果をみれば、あきらかであろう。

- (12) a. This is a system that works *direct/directly* against the objective. (original number 13)  
 b. This is a team that works *direct/directly* from nature. (original number 113)

(13)

Sentence		only m	only p	both	reject	minus	plus
12a:	BrE	0	50	0	0	0	50
	AmE	0	49	1	0	1	50
	Total	0	99	1	0	1	100
12b:	BrE	6	20	15	0	21	44
	AmE	3	38	8	1	11	46
	Total	9	67	23	1	32	90

(12a) では、TEMPORAL な読みの可能性ゆえに、イギリス人、アメリカ人とも、ほぼ全員が *directly* のほうを支持し、*direct* はほとんどもちいないと回答している。それにたいし、(12b) では、TEMPORAL な読みの可能性はそれほど優先されないため、程度差はあるにしても、*direct* と *directly* ともにもちいられ、しかもその傾向はイギリス人のほうに顕著にみられるということが指摘できよう。また、そもそもの出典は、ともに LOB からとられたもので、(12a) は *directly* をとらせたもの、(12b) は *direct* をとらせたものであったけれども、実際の判断テストでは微妙な差異が生じているところが興味深いといえよう。(なお、うへの表の右上に示されている *minus* および *plus* という標識は、それぞれの例文で、*-ly* 形のつかない副詞を容認するかあるいは *-ly* 形のついた副詞を容認するかについて被験者全体の判断の総数を示したものである。)

実際の調査では、主語の有生・無生、目的語の軽重、前置詞の異同等々に

よる影響を調べるため意図された例文がほかにも用意され、それらの調査結果の総数は、以下のとおりである。

(14)

	only m	only p	both	reject	minus	plus
BrE	100	277	171	2	271	448
AmE	16	443	89	2	105	532
Total	116	720	260	4	376	980

23

さらに、これらの結果を比率であらわすと、次の (15) のようになる。

(15)

	only m	only p	both	reject	Total	minus	plus
BrE	18.2	50.4	31.1	0.4	100	37.7	62.3
AmE	2.9	80.5	16.2	0.4	100	16.5	83.5
Total	10.6	65.5	23.6	0.4	100	27.7	72.3%

24

(11) で示したコーパスにもとづいたデータ結果のみならず、(15) の判断テストの結果は、全体として、イギリス英語、アメリカ英語ともに、directly を使う傾向が非常に高く、とりわけ、アメリカ英語では、8 割強の被験者が directly の使用に傾斜している。また、direct の使用にかんしていえば、direct および directly の両方を持ちいる場合、また、逆に、direct を副詞としては使わない場合のそれぞれにおいて、アメリカ英語の比率は、イギリス英語に比べて、約 1/2 にとどまっている。従来、この direct のような -ly 形をつけない副詞は、とりわけ、口語の場合、アメリカ英語に顕著な語法とされてきたけれども、<sup>25</sup> まったく逆の調査結果が生じていることは注目に値する。

いずれにしても、16世紀以降、-ly 形のつく副詞と -ly 形をつかない副詞が英語史のなかで並存した形で姿をとどめながら、今日に至っている一方で、Opdahl (1989) の調査結果が示すように、-ly 形をつかない副詞の使用頻度が、かなり低くなってきている事実<sup>26</sup>をまえにすれば、この副詞の文法的位置づけを再考する必要に迫られるのも無理からぬことであろう。

Heine *et al.* (1991) では、文法化のプロセスにおいて、認知的実在物 A から B への移行のさいは、両者が共存する中間段階<sup>27</sup>を経由するとして、次のような図式を示している。

(16) A            A, B            B<sup>28</sup>

文法化とは、元来、Aとして認知されていたものが、ある状況でBとしても認知され、のちに、後者の認知化が独立するというように漸進的かつ連続的に推移するプロセスである。この文法化という現象に照らして、当該の *direct* という *-ly* 形についていない副詞の位置づけを考えてみると、もともと、ME 期に、強勢のおかれない母音の弱化現象によって、形容詞の接尾辞 *-lic* と副詞の接尾辞 *-lice* が同形の *-lic (=ly)* となり、また、形容詞の語幹（便宜上、 という記号であらわすことにする）と副詞の *-e* もまた、同様の理由から、同形の  となり、*-ly* 形のつく副詞と *-ly* 形のつかない副詞の両者が並存する形で残ってきた。しかしながら、その意味や文法的機能については、微妙な変化をとげつつあり、(16) の図式でいえば、両者が共存する「中間段階」の A、B から B への移行期にこの *-ly* 形のつかない副詞は位置しているように思われる。

もし、この *-ly* 形についていない副詞が *-ly* のついている副詞とまったく同じ文法的ステータスをもっているのならば、同様の文法的ふるまいを示すはずであるのに、以下の事例は、*-ly* 形についていない副詞の微妙な文法的ステータスのゆれを示しているにほかならない。

たとえば、次の (17) では、*-ly* 形についていない副詞と *-ly* 形についている副詞は交換可能であることを示しているが、(18) のように、同じ様態をあらわす副詞の場合であっても、同じ結果が生じるとは必ずしもかぎらない。

(17) a. He spoke *loud* and *clear*.

b. He spoke *loudly* and *clearly*.

(18) a.\*He spoke *brief* and *frank*.

b. He spoke *briefly* and *frankly*.

また、-ly 形のついていない副詞は動詞句のうしろだけに生じ、主語と動詞のあいだにはけっして生じない。

(19) a. She drove her classic car into the garage *slow*.

b. She drove her classic car into the garage *slowly*.

(20) a.\*She *slow* drove her classic car into the garage.

b. She *slowly* drove her classic car into the garage.

さらに、分裂文では、焦点の位置には、-ly 形のついている副詞のみ生起し、-ly 形のついていない副詞はあらわれない。

(21) a.\*It was *slow* that she drove her classic car into the garage.

b. It was *slowly* that she drove her classic car into the garage.

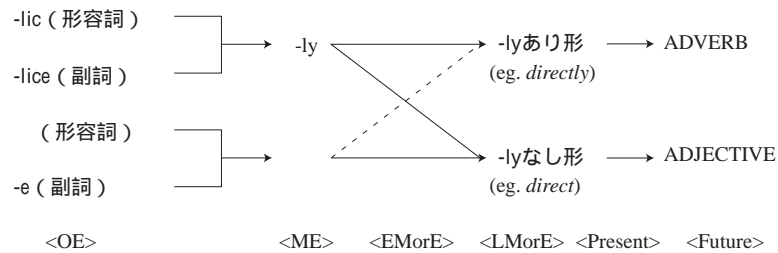
以上のような統語的ふるまいの違いからもあきらかなように、-ly 形のついていない副詞と -ly 形のついている副詞とではなんらかの差異が存在し、その形態のみならず、その意味においても、-ly 形のついていない副詞は、次第に「副詞」としてのステータスを失いつつ、やがては、「形容詞」というステータスに推移していくのではないかということが予想される。

たとえば、この仮説を支持する根拠のひとつとして、口語体の慣用表現としてしられる 'Take it easy.' において、大多数の辞書は、この *easy* を副詞

として記述しているけれども、*Collins COBUILD English Dictionary* (1995) においては、「動詞 + 形容詞」の組みあわせとして表記されていることをあげることができよう。<sup>29</sup> この事実は、あきらかに、*easy* が形容詞の範疇にはいつていることを示している。

前節でみてきた *-ly* 接尾辞の発達過程および今節で考察した *-ly* 形のない副詞の位置づけについて、Guimier (1985) で提案された実体化と形式化という複数のプロセスを参考にして、図式化すれば、次のようになるであろう。

(22)



OE 期には、意味のうえでも、形態のうえでも、形容詞と副詞は峻別されていたが、ME 期にはいつて、形態上の融合がおこり、その後、EModE 期では、*-ly* 接尾辞は *-ly* あり形と *-ly* なし形に実現され、他方、形は、主として、*-ly* なし形として（名詞に *-ly* を付加することで形容詞を作る語形成はあるけれども、形態上の並存状況はみられないので、うえの図では、点線で示している）実現され、それぞれの ADVERB あるいは ADJECTIVE という文法範疇を形成している。

つまり、文法化の枠組みでは、*-ly* 接尾辞とは、それぞれが実体化のプロセスにおいて、*-ly* あり形と *-ly* なし形に意味づけされ、とりわけ、*-ly* 接尾辞から導かれた *-ly* のつかない形式で意味づけされたものは、やがて、文



法範疇のひとつである ADJECTIVE として実現されるようになるのである。

#### 4. おわりに

本稿では、一般に英語の副詞を形成する接尾辞と考えられている -ly 接尾辞をとりあげ、通時的な観点および共時的な観点の両方から、文法化の枠組みにもとづいて、-ly 接尾辞の位置づけを試みた。

まず、従来の -ly 形の副詞を形容詞から一律に派生させる形態論的試みの不備を指摘し、次に -ly 接尾辞の語源的発生からその確立および発達のプロセスを通時的に概観し、文法化の枠組みから、Guimier (1985) の仮説にもとづいて、-ly 接尾辞の位置づけを検討した。さらに、現代英語における -ly 形のつく副詞と -ly 形のつかない副詞の並存状況を共時的な観点からコーパスに依拠して検討し、ly 形のつかない副詞が、次第に形容詞としての範疇のなかで実現されていくという仮説を提案した。

本稿では、現代英語の文法的推移を調べるために、direct と directly の並存関係のみを根拠として論を進めてきたけれども、より説得力のある議論とするには、他の副詞の検討もふくめて、より包括的な観点から、文法化の現象をとらえる必要があるだろう。しかしながら、本稿で提示した仮説は、Bolinger (1977) で主張されている「意味が異なれば、形式も異なり、形式が異なれば、意味も異なる」という “the principle of one meaning, one form”<sup>80</sup>とあいまって、形式と意味との健全な関係をあらわすものとして、興味深い提案となりえよう。

#### 注

\*本稿は、1997年11月15日に開かれた日本比較文化学会関西支部11月例会（於同志社大学）および同年12月20日に開かれた同志社大学言語学会冬季研究会（於同志社大学）において、口頭発表した原稿に加筆・修正をほどこしたものである。名古屋学院大学の赤楚治之先生には、いつものことながら、草稿段階で目をともし

ていただき、きわめて有意義なコメントをいただいた。ここに記して、感謝の意をあらわしたい。

- 1 O. Jespersen, *Essentials of English Grammar* (London: Allen and Unwin, 1933) 94.
- 2 V. Adams, *An Introduction to Modern English Word-formation* (London: Longman, 1973) 27.
- 3 M. Aronoff, *Word Formation in Generative Grammar* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1976) 37.
- 4 詳しくは、G. Kjellmer, "Why Great: Greatly but not Big: \*Bigly? On the Formation of English Adverbs in -ly," *Studia Linguistica* 38 (1984): 1-19を参照。
- 5 同様の方法で、*Collins Dictionary of the English Language* をもちいた調査では、-ly 副詞 / 形容詞の比率は29%になっている。Ibid. 2を参照。
- 6 一般に、基体の統語範疇を変更する接辞は派生接辞、変更しない接辞は屈折接辞とよばれるが、当該の -ly 接尾辞を派生接辞とみなすか、屈折接辞とみなすかの問題については、議論のわかれるところである。本稿では、議論の混乱を避けるため、これ以上は深くたちらないことにする。詳しくは、Y. Sugioka and R. Lehr, "Adverbial -ly as an Inflectional Affix," *Papers from the Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology and Syntax*, eds. J.F. Richardson, M. Marks and A. Chukerman (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1983) 293-300; A.M. Zwicky, "Why English Adverbial -ly is not Inflectional," *CLS 31: Papers from the 31st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Vol. 1: The Main Session*, comp. and eds. A. Dainora, R. Hemphill, B. Luka, B. Need and S. Pargman (Chicago: Chicago Linguistic Society, 1995) 523-35 および T. Nevalainen, "The Process of Adverb Derivation in Late Middle and Early Modern English," *Grammaticalization at Work: Studies of Long-term Developments in English*, eds. M. Rissanen, M. Kytö and K. Heikkonen (Berlin: Mouton de Gruyter, 1997) 145-89などを参照。
- 7 Fabb (1984) では、-ly 接尾辞は基体の項構造の受け継ぎをおこなわない旨が述べられてはいるが、この接尾辞が統語部門で導入されるのか、あるいは語彙部門で導入されるのかについては明確に言及されていない。N.A.J. Fabb, *Syntactic Affixation*, Ph.D. dissertation, MIT, 1984, 233-4を参照。
- 8 詳しくは、B.L. Derwing, "Morpheme Recognition and the Learning of Rules for Derivational Morphology," *The Canadian Journal of Linguistics* 21 (1976): 38-66を参照。
- 9 P.J. Hopper and E.C. Traugott, *Grammaticalization* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993) xv.

- 10 A. Meillet, "L'évolution des Formes Grammaticales," *Linguistique Historique et Linguistique Générale* (Paris: Champoin, 1912) 131.
- 11 Hopper and Traugott xvi.
- 12 「文法化」という用語は、文法現象の焦点のあて方によっても、さまざまな用語が案出され、たとえば、“reanalysis” (Heine *et al.* 1991: 167)、“syntacticization” (Givón 1979: 208ff)、“semantic bleaching” (Heine *et al.* 1991: 155)、“semantic weakening” (Guimier 1985: 158)、“condensation” (Lehmann 1982: 10/11)、“reduction” (Langacker 1977: 103-7)、“subduction” (Guillaume 1964: 73-86) などがあてられている。
- 13 B. Heine, U. Claudi and F. Hünnemeyer, “From Cognition to Grammar Evidence from African Languages,” *Approaches to Grammaticalization, Vol. 1*, ed. E.C. Traugott and B. Heine (Amsterdam: John Benjamins, 1991) 149-50.
- 14 *O.E.D.* の説明では、形容詞の clean にも、13世紀頃になると、副詞の影響をうけて、‘entire, complete, total perfect, sheer’ といった意味をになうようになったとされている。J.A. Simpson and E.S.C. Weiner (prep.), *The Oxford English Dictionary*, second edition (Oxford: Oxford University Press, 1989) 294.
- 15 B. Foster, *The Changing English Language* (London: Macmillan, 1968) 213.
- 16 C. Guimier, “On the Origin of the Suffix -ly,” *Historical Semantics Historical Word-Formation*, ed. J. Fisiak (Berlin: Mouton, 1985) 158.
- 17 *Ibid.* 167.
- 18 S. Greenbaum and R. Quirk, *Elicitation Experiments in English* (London: Longman, 1970) 3.
- 19 L. Opdahl, “‘Did they purchase it direct or directly?’ On *Direct* and *Directly* as Verb Modifiers in Present-day British and American English,” *Essays on English Language in Honour of Bertil Sundby*, ed. L.E. Breivik, A. Hille and S. Johansson (Oslo: Novus Forlag, 1989) 247.
- 20 本稿の議論と直接の関連はないけれども、direct および directly と動詞とのコロケーションについては、次のようなデータが報告されている。
- direct (LOB): 18種類の動詞と共起(とりわけ、go と reseed と)  
(Brown): 2種類の動詞と共起(buy と sell のみと)
- directly (LOB): 51種類の動詞と共起(とりわけ、concern, contradict および relate と)  
(Brown): 73種類の動詞と共起(とりわけ、come, concern, deal, get および relate と)
- Opdahl 247 を参照。

- 21 *LDCE* (1978) では、direct には、“in a straight line; without stopping or turning aside” という語義が、directly には、“1. in a direct manner,” “2. at once” および “3. *infnl* soon; almost at once” という語義がそれぞれあたえられている。P. Procter (ed. in chief), *Longman Dictionary of Contemporary English* (London: Longman, 1978) 303.
- 22 Opdahl 249.
- 23 Opdahl 250.
- 24 Opdahl 250.
- 25 キルヒナー (1983) では、「《米》口語は《英》よりも無語尾の (-ly なしの) 副詞 (flat adverb) をよく保存している」と述べられている。G. キルヒナー、『アメリカ英語事典』前島儀一郎・丹羽義信・佐野英一・山岸勝榮共訳 (東京: 大修館書店、1983) 187.
- 26 Nevalainen (1997) では、Helsinki Corpus にもとづいて、Late Middle English から Early Modern English にかけて、具体的には、1350-1420、1500-1570、1640-1710 のそれぞれの時期において、-ly 形のついている副詞と -ly 形のついていない副詞の生起頻度が調査され、-ly 形のついていない副詞の使用頻度は、それぞれの時期を追うごとに、21% 16% 13% というように、減少傾向をみせている。このような -ly 形のついていない副詞の使用頻度の減少傾向が、現代英語においてだけでなく、通時的な観点からも観察されうことは、本稿の議論を支えるうえで、非常に興味深い事実といえよう。詳しくは、Nevalainen 161を参照。
- 27 Heine & Reh (1984) では、この中間段階を “split” と名づけている。B. Heine and M. Reh, *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages* (Hamburg: Helmut Buske, 1984) 57.
- 28 Heine, Claudi and Hünnemeyer 166.
- 29 J. Sinclair (ed. in chief), *Collins COBUILD English Dictionary* (London: HarperCollins, 1995) 524.
- 30 D. Bolinger, *Meaning and Form* (London: Longman, 1977) 19.

## REFERENCES

- Adams, V. *An Introduction to Modern English Word-formation*. London: Longman, 1973.
- 荒木一雄・宇賀治正朋. 『英語史 A』東京: 大修館書店、1984.
- Aronoff, M. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press, 1976.

- Bolinger, D. *Meaning and Form*. London: Longman, 1977.
- Breivik, L.E., A. Hille and S. Johansson. (eds.). *Essays on English Language in Honour of Bertil Sundby*. Oslo: Novus Forlag, 1989.
- ブルンナー, K. 『英語発達史』 松浪有・小野茂・忍足欣四郎・秦宏一共訳. 東京: 大修館書店, 1973.
- Bybee, J.L. and W. Pagliuca. " Cross-linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning. " *Historical Semantics Historical Word-Formation*. Ed. J. Fisiak. Berlin: Mouton, 1985.
- Derwing, B.L. " Morpheme Recognition and the Learning of Rules for Derivational Morphology. " *The Canadian Journal of Linguistics* 21 (1976): 38-66.
- Fabb, N.A.J. *Syntactic Affixation*. Ph.D. dissertation, MIT, 1984.
- Fisiak, J. (ed.). *Historical Semantics Historical Word-Formation*. Berlin: Mouton, 1985.
- Foster, B. *The Changing English Language*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1970.
- Givón, T. " Notes on the Semantic Structure of English Adjectives. " *Language* 46 4 (1970): 816-37.
- Givón, T. *On Understanding Grammar*. Orlando: Academic Press, 1979.
- Greenbaum, S. *Verb-Intensifier Collocations in English*. The Hague: Mouton, 1970.
- Greenbaum, S. and R. Quirk. *Elicitation Experiments in English*. London: Longman, 1970.
- Guillaume, G. *Langage et Science du Langage*. Paris: Presses de l'Université Laval, 1964.
- Guimier, C. " On the Origin of the Suffix -ly. " *Historical Semantics Historical Word-Formation*. Ed. J. Fisiak. Berlin: Mouton, 1985.
- Hanks, P. (ed.). *Collins Dictionary of the English Language*. London: Collins, 1979.
- Heine, B. and M. Reh. *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*. Hamburg: Helmut Buske, 1984.
- Heine, B., U. Claudi and F. Hünnemeyer. " From Cognition to Grammar Evidence from African Languages. " *Approaches to Grammaticalization, Vol. 1*. Ed. E.C. Traugott and B. Heine. Amsterdam: John Benjamins, 1991.
- Hopper, P.J. " On Some Principles of Grammaticization. " *Approaches to Grammaticalization, Vol. 1*. Ed. E.C. Traugott and B. Heine. Amsterdam: John Benjamins, 1991.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Jackendoff, R. *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press, 1977.
- Jespersen, O. *Essentials of English Grammar*. London: Allen and Unwin, 1933.
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Vol. VII*. Copenhagen:

- Munksgaard, 1949.
- キルヒナー, G. 『アメリカ英語事典』前島儀一郎・丹羽義信・佐野英一・山岸勝榮  
共訳. 東京:大修館書店、1983.
- Kjellmer, G. "Why *Great*: *Greatly* but not *Big*: \**Bigly*? On the Formation of English  
Adverbs in *-ly*." *Studia Linguistica* 38 (1984): 1-19.
- Langacker, R.W. "Syntactic Reanalysis." *Mechanism of Syntactic Change*. Ed. C.N. Li.  
Austin: University of Texas Press, 1977.
- Lehmann, C. *Thought on Grammaticalization: A Programmatic Sketch, Vol. 1*. Köln:  
Universität zu Köln, Institut für Sprachwissenschaft, 1982.
- Li, C.N. (ed.). *Mechanism of Syntactic Change*. Austin: University of Texas Press, 1977.
- McCawley, J.D. *The Syntactic Phenomena of English, Vol. 1*. Chicago: University of  
Chicago Press, 1988.
- Meillet, A. *Linguistique Historique et Linguistique Générale*. Paris: Champoin, 1912.
- Meillet, A. "L'évolution des Formes Grammaticales." *Linguistique Historique et  
Linguistique Générale*. Paris: Champoin, 1912.
- Nevalainen, T. "The Process of Adverb Derivation in Late Middle and Early Modern  
English," *Grammaticalization at Work: Studies of Long-term Developments in English*.  
Eds. M. Rissanen, M. Kytö and K. Heikkonen. Berlin: Mouton de Gruyter, 1997.
- Opdahl, L. "'Did they purchase it direct or directly?' On *Direct* and *Directly* as Verb  
Modifiers in Present-day British and American English." *Essays on English Language  
in Honour of Bertil Sundby*. Ed. L.E. Breivik, A. Hille and S. Johansson. Oslo: Novus  
Forlag, 1989.
- Procter, P. (ed.-in-chief). *Longman Dictionary of Contemporary English*. London:  
Longman, 1978.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the  
English Language*. London: Longman, 1985.
- Radford, A. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University  
Press, 1988.
- Rissanen, M., M. Kytö and K. Heikkonen. (eds.). *Grammaticalization at Work: Studies of  
Long-term Developments in English*. Berlin: Mouton de Gruyter, 1997.
- Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner. (prep.). *The Oxford English Dictionary*. Second edition.  
Oxford: Oxford University Press, 1989.
- Sinclair, J. (ed. in chief). *Collins COBUILD English Dictionary*. London: HarperCollins,  
1995.
- Sugioka, Y. and R. Lehr. "Adverbial *-ly* as an Inflectional Affix." *Papers from the*

- Parasession on the Interplay of Phonology, Morphology and Syntax*. Ed. J.F. Richardson, M. Marks and A. Chukerman. Chicago: Chicago Linguistic Society, 1983.
- Traugott, E.C. and B. Heine. (eds.). *Approaches to Grammaticalization, Vol. 1*. Amsterdam: John Benjamins, 1991.
- Yamauchi, N. "Semantic Shift in Manner, Degree and Intensity Adverbs: An Evidence for Lexical Derivation." 『比較文化研究』 3 (1985): 75-97.
- Yamauchi, N. "Aspects of Sentence Adverbs in English: In Support of Lexical Derivation." *Doshisha Literature* 32 (1986): 138-72.
- 山内信幸. 「A Proposal for Lexical Derivation 副詞の修飾機能をめぐって」 『主流』 48 (1987): 89-104.
- 山内信幸. 「「形容詞的なもの」と「副詞的なもの」 A Prototypical Approach」 『同志社大学英語英文学研究』 52-53 (1991): 238-53.
- Zwicky, A.M. "Why English Adverbial *-ly* is not Inflectional." *CLS 31: Papers from the 31st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, Vol. 1: The Main Session*. Comp. and ed. A. Dainora, R. Hemphill, B. Luka, B. Need and S. Pargman. Chicago: Chicago Linguistic Society, 1995.

## On the Status of an *-ly* Suffix: From the Viewpoint of Grammaticization

Nobuyuki Yamauchi

Key words: English, adverb, adjective, *-ly* suffix, grammaticization

The aim of the present paper is to take into consideration the status of an *-ly* suffix in English, which is assumed to function as a general suffix to form an adverb from any adjective. The discussion includes diachronic and synchronic investigation of the suffix, based on the framework of grammaticization.

The first section is devoted to the criticism of the traditional view of forming adverbs from corresponding adjectives by means of suffixation. Some counterexamples are presented in morphology, syntax and semantics or language acquisition theory to the widely assumed approach that an *-ly* suffix serves as a highly productive suffix to form adverbs.

The second section diachronically explores the development of an *-ly* suffix from its genesis through its development, and the third section synchronically analyzes the coexistence of adverbs with *-ly* suffixes and adverbs with zero suffixes in Modern English, both of which are supported by the framework of grammaticization.

What is shared in all definitions of grammaticization, according to Heine *et al.* (1991), is that (a) it is conceived as *a process*, whether interpreted diachronically or synchronically, (b) it is *a morphological process* and (c) it is *unidirectional* as long as it shifts from less grammaticized items to more

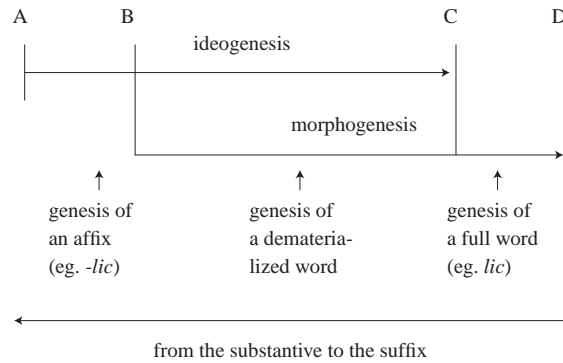


grammaticalized ones, but not vice versa.

In the second section is surveyed the origin of *-ly* suffixes and their development from Old English, through Late Middle and Early Modern English, to Modern English. In the period of Old English the prevalent tendency of forming adverbs was the addition of *-e* or *-lice* to adjectives. As far as the development of adverb suffixes is concerned, in Middle English, adverbs with *-e* suffixes or *-lice* suffixes happened to coincide with adjectival forms as a result of the sound weakening of final unstressed vowels and the muting of their corresponding letters. From Early Modern English on, the Old English opposition of *-lic* in adjectives and *-lice* in adverbs was converged through the intermediate stage of the coincidence of *-lic* in adjectives and *-lic* in adverbs into the common form of *-ly*.

According to Guimier (1985), the substance *lic* in Old English originally derived from the stem *\*lig-* in Proto-Indo-European, which designates ‘Gestalt,’ and developed later into two different lines, that is, a noun meaning ‘a body, dead or living’ and a suffix denoting ‘similar.’ Guimier (1985) aptly attempts to explain the origin of *-lic* in the process called “lexigenesis.” It is composed of two successive movements: the first produces the material significate of the word and the second its formal significate. The first movement, called ideogenesis, corresponds to a process of notional ideation and the second movement, called morphogenesis, to a process of structural ideation. At the final stage of lexigenesis, the word in question appears as a synthesis of meaning and form, where an example of *-ly* can be schematized as follows:

(1)



Two contributions of Guimier (1985) as a workable model to capture the appropriate status of an *-lic* suffix can be summarized as the presentation of the relationship between the substance *lic* and the suffix *-lic* in a successive continuum and as the realization of the shift in two different processes, that is, ideogenesis and morphogenesis.

The third section proposes a more inclusive treatment of the coexistence of adverbs with *-ly* suffixes and adverbs with zero suffixes in Modern English, along the line of a model proposed by Guimier (1985). Opdahl (1989) is referred to as the first step to center the discussion on the synchronic analysis of the adverbs concerned, where the frequency in use of *direct/directly* is investigated in British and American English based on the Lancaster-Oslo/Bergen Corpus and the Brown Corpus, and the use of *direct/directly* is also given a supplementary examination by the “judgment test” utilized in Greenbaum & Quirk (1970). The statistical results suggest that suffixless adverbs are less in use and that they should be treated otherwise in their grammatical status. Given some examples showing that

